[別紙2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　　宮 本　有 紀

本研究は，痴呆患者の介護者の負担について特に痴呆患者の可動性に着目することで，動ける痴呆患者の介護者と動けない痴呆患者の介護者における介護負担に影響を与える問題行動の特徴の違いから考察したものである。痴呆患者を介護する者の介護負担に関して、患者の可動性によって分類し比較検討を行った研究はこれまでにない。

本研究では、在宅で生活する痴呆患者を介護する者を対象とし、全国の通所施設を利用している在宅痴呆患者の介護者に通所施設を通じて調査協力の依頼がなされた。調査内容は，主たる介護者の主観的介護負担のほか，介護負担に影響を与えると考えられる年齢，性別，患者との続柄などの介護者属性や，痴呆患者の年齢，性別，認知機能，日常生活自立度（ADL)および 14 項目における問題行動の頻度であった。本研究では，全て信頼性，妥当性がすでに示されている尺度を用いられている。

主要な結果は下記の通りである。

1．本研究における解析対象となった通所施設を利用している痴呆患者の介護者379名中，動ける痴呆患者を介護している者は 325 名，動けない痴呆患者を介護している者は 54 名であり，介護者の年齢，性別，患者との続柄，患者の年齢，性別，痴呆の診断には動ける群と動けない群で有意な違いは見られなかった。

2．痴呆患者の状態についての施設職員による客観的評価によると、動ける痴呆患者は動けない痴呆患者に比べ，有意に認知機能が高く，また日常生活自立度も高かった。

3．動ける痴呆患者は動けない痴呆患者に比べ,「徘徊」,「危険行為」,「誣告」,「否定曲解」,「ものを隠す」,「無意味な作業」,「他人とのトラブル」,「攻撃的言動」,「まつわりつく/同じ質問を繰り返す」の問題行動の頻度が有意に高かった。動けない痴呆患者において有意に高い頻度で観察された問題行動は「叫ぶ」という行動のみであった。

4．患者の認知機能、ADL、問題行動の頻度から、動ける痴呆患者は中期痴呆、動けない痴呆患者は後期痴呆に属すると推測された。

5．介護者から自記式調査票によって主観的介護負担について得た回答によると、動ける痴呆患者を介護する者においては，動けない痴呆患者を介護する者に比べ，有意に主観的介護負担が高かった。

６．動ける痴呆患者を介護する者の主観的介護負担と痴呆患者の問題行動の頻度の相関分析により，「危険行為」以外の全ての問題行動において，有意な相関が示された。介護負担と最も高い相関を示していた問題行動は「徘徊」，次いで「攻撃的言動」，「否定曲解」，「まつわりつく/同じ質問を繰り返す」と続いていた。患者の認知機能で統制した偏相関分析においても同様な結果が示された。

動けない痴呆患者を介護する者の主観的介護負担と痴呆患者の問題行動の頻度の相関分析の結果，介護負担と最も高い相関を示していたのは「まつわりつく/繰り返す」の問題行動であり，次いで「夜騒ぐ」，「弄便」，「叫ぶ」と続いていた。患者の認知機能で統制した偏相関分析においても同様な結果が示された。

７．動ける痴呆患者を介護する者の介護負担を従属変数，介護者の性別，年齢，続柄（配偶者/非配偶者），患者性別，診断（アルツハイマー/非アルツハイマー），認知機能得点をコントロールし，介護負担に有意な相関を示した問題行動 13 項目を独立変数として投入したステップワイズの重回帰分析の結果，「徘徊」，「団らんの妨害」，「まつわりつく/繰り返す」，「攻撃的言動」が動ける痴呆患者の介護負担に有意に寄与していることが示された。

動けない痴呆患者の介護者の介護負担を従属変数とし，同一の項目でコントロールし，動けない患者を介護する者の介護負担に有意な相関を示した問題行動５項目を独立変数として投入した分析の結果，動けない患者を介護する者の負担に有意に寄与する問題項目として「まつわりつく/繰り返す」が示された。

８．介護負担に影響を及ぼす問題行動は、動ける患者と動けない患者ではそのあり方が異なっており、動ける患者の問題行動はより頻度が高かった。患者の呈する問題行動の種類とその頻度によって、動ける痴呆患者と動けない痴呆患者の介護者の主観的介護負担の大きさに差が生じることが示唆された。

以上，本論文は，痴呆患者を介護する者の介護負担を，痴呆患者の可動性に着目し，動ける痴呆患者と動けない痴呆患者の問題行動に焦点を当てて考察した点で独創的である。またさらに，介護者の主観的負担に関連する患者の行動が示されたことで，患者，介護者双方に対する介入の優先度を特定しやすくなるという点で、患者・介護者双方への援助が必要とされている痴呆に関する看護実践上の有用性をも兼ね備えており、学位の授与に値するものと考えら